

をArts 第13号

場所に結び付けられる 身体と記憶



特集「蔵を辿れば、まちの歴史が見えてくる」

アーティストコラム 菊池敏正

Photo: 上原ミワ

ARTIST'S VIEW

ダンスカンパニー ときかたち 尾花藍子



2 |

〈ときかたち〉のメンバーが 滞在中に訪れた場所で 撮影したスナップ。



上毛線 生活のすぐそこ (安藤)



昭和の建物と新しい広場(尾花)



雨が降っていました。(メル)



「立ち入り禁止」区域が 多いかもしれない (尾花)



積み重なった絵画 (尾花)



前橋を生きる人たち(尾花)

INTERVIEW

空間というキャンバスを彩る 身体という絵の具

SPACE AS CANVAS, BODY AS PAINTS.

〈場〉と〈身体〉、〈表現者〉と〈観客〉との「間 (あわい)」にあるものを探りながら、絵画的とも 演劇的ともいえる、ダンスの枠を超えた作品へ と昇華させる〈ダンスカンパニー ときかたち〉。 今回、アーツ前橋の滞在制作プログラムとして は初の、身体表現を行うグループとして参加す る〈ときかたち〉主宰の尾花藍子さんに、作品 への取り組みや、前橋での活動に至った経緯に ついて聞いた。

聞き手: 遠藤千尋

-2017年10月に「前橋市芸術文化れんが蔵」で行っ た公演『路を辿る』について、開催に至った経緯をお 聞きしたいのですが。

ダンサーだけでなく、観客も一緒に身体や空間を共 有するための場、その枠組み自体を作るような長期プ ロジェクトをやりたいと思ったことがきっかけでした。 そこから、「前橋市芸術文化れんが蔵」という魅力的な 場所にたまたま出会い、1週間の滞在制作と公演をす ることが決まったんです。偶然にも、メンバーの安藤 暁子が群馬県出身であることもきっかけになりました。 もともと、観客の身体をどう環境に感応させるかとい うことには意識的でしたが、劇場で公演をして観客を 呼ぶだけではなく、観客の生活環境からその場所へ来 るまでの距離も作品の一部になるようなものを作ろう と思いました。

-実際、観客とどのようなやりとりをしたんですか? 会場に足を運ぶまでの間、1週間ごとに合計3通の

手紙を送り、手紙の内容についてのインタビューを行 いました。また、それを随時作品制作にも反映させて いきました。プロジェクトメンバーと観客が共に作品 を作ることをコンセプトに、お互いの関係を築きなが ら、演者と観客の境界を無くそうとしました。会場で は自由にリラックスした状態でいてもらって、自分が ダンサーを見ているのか、ぼーっとしているのか分か らない中間領域にいて、自分を内観するような時間と 空間を共有してもらえるような場つくりを目指しまし た。終わった後にも一か月ほどやりとりをしたので、 最後まで「観客」という一つの役として参加してもらい、

ープロジェクトの制作にあたって、どんなことを大切 にしていますか?

一緒に作品を作ったような感覚でした。

言語化するのがとても難しいのですが、「環境に振 り付けられる身体」ということをベースコンセプトに していて、現在の環境や過去の記憶と向き合った時に、 自分の身体や直感が感応するポイントを出発点にする ことを大切にしています。ここでいう「環境」は、自 分の身体の周りにある全てのことで、周りの環境と自 分との間に感じる違和感を膨らませたり、尖らせたり して抽象化したものを作品にしています。

-他に、作品をつくるプロセスで意識していることは?

歩く・座る・立つ・走るなどの基本動作だけで、い かに舞台に上がれるかということを意識しています。 初期の作品では動きが多かったのですが、その場所性 とダンサーの身体性をより浮かび上がらせるには、絶 対にこれだという最低限の動きを積み上げていく方が よりビビットに感じられると考えています。よくダン



サーには、「その場にどう立つか」を自身に問うことに 重点を置いてもらっていて、大げさに聞こえるかもし れませんが、その一歩で世界を動かして欲しいという 気持ちがあります。

3 |

- 尾花さんは個人でも作品を発表されていますが、 〈ときかたち〉で活動する時との違いは?

私一人の時はまず、自分自身の人生や辿ってきた道 のりを、場に感応させることに重きを置いて作品を作 るのですが、〈ときかたち〉ではさらに、寄り集まった メンバーの実感や問題意識を取り入れるようにしてい ます。そうすることで、より作品に多様性が生まれる と考えています。

ー〈ときかたち〉の作品には、演劇など、コンテンポラ リーダンス以外の要素も感じました。他のジャンルか ら影響を受けることはありますか?

生きている中で無意識に影響を受けてはいると思い ますが、あまりジャンルは意識していません。その時 に表現したいものが、既存のジャンルではたまたま表 現しづらく模索した結果、どのジャンルでもある/な い作品になることが多いです。いままでは、自ら積極 的にジャンルを名乗ってきませんでしたが、これから は、ジャンルに囚われない身体表現全般を、ダンスと 呼んでいくと面白いんじゃないかなと考えています。 「ダンスカンパニー」という言葉をあえて〈ときかたち〉 に付けることで、そういった提示をしていきたいです。 - 尾花さんが運営しているシェアハウス&スタジオ 〈LAB83〉は、どのような場所なのでしょうか?

〈LAB83〉は自分の舞台作品を育ててくれた場所だ と思います。絵画では絵の具を取り扱いますが、ダン



2017年10月に公演を行った「前橋市芸術文化れんが蔵」。 三河町にある酒蔵だった建物を改装し、イベントや演劇な ど多目的利用に向け整備されている。建設当時のままの柱 や梁が残された広々とした内部は歴史を感じる独特な空間。



アサヒ・アート・フェスティバル コザクロッシング 2013 沖縄黒人街ツアー型作品『風と朝と夜。』 @コザ銀天街、照屋公園、黒人街廃墟/沖縄県 2013年 Photo:Toyozato Tomoyuki

沖縄市コザに1か月間滞在。沖縄の歴史深い場所、コザ黒人街の現在と歴史 のリサーチを経て、参加者とともに会場を移動しながら街の景色とパフォー マンスを体験するツアー型プログラムを行った。

ス作品で取り扱うのは生身の身体そのものです。なの で、ダンス作品を作る時も、絵の具と向き合うように ダンサーと向き合い続けたいと思い、衣食住を共にす る考えが浮かびました。若手ダンサーを中心としたア ーティストたちと暮らしを共にしながら作品制作をし たのですが、結果、生活と創作に垣根がなくなり、現 代社会とは切り離された共同体になったことで、舞台 上でダンサー同士が触発し合う関係性が見えやすくな ったように思います。でも近年は、シェアハウスでの 制作からアーティスト・イン・レジデンスでの制作へ と切り替わってきました。シェアハウスの場合、ダン サー同士の一体感はすごく強まるのですが、さらに「環 境に振り付けられる身体」にフォーカスを当てようと 思った時に、全員で異なる場所へ行き、一定期間住む 創作スタイルが合っているのではないかと考えたため

一沖縄市コザで制作した作品『風と朝と夜。』では、 場所と作品との密接な繋がりを感じました。

この作品は、〈ときかたち〉を立ち上げる前の尾花個 人の作品ですが、今大切にしている「環境に振り付け られる身体」の原点になったと思っています。1か月 の滞在制作の間に黒人街の廃墟に出会い、この場所と 一緒に踊りたいと感じたことがきっかけで、最終的に は私以外は全て地元の市民の方たちと場所だけで作品 を作りました。これ以来も、このような場所ありきの 制作というのは意識していましたが、主軸ではなかっ たように思います。最近になって「これが〈ときかたち〉 でやりたかったことなのかも」と思うようになりました。 一今回の滞在制作ではどのようなことをしたいと考え

〈ときかたち〉がアーツ前橋の滞在制作で初めての 身体表現を行うグループでの招聘であるということ を生かして、身体を使って沢山の人と出会えるよう なリサーチをしたいとメンバーと話をしています。 例えば、ダンスに馴染みがある人と、そうでない人 の両方と交流できるようなパブリックイベントを企 画したりとか。その時は、ぜひ多くの方に来て頂け たら嬉しいです。

- 〈ときかたち〉 のような身体表現を扱う作品を体感 する時、どういった姿勢で臨めば、より楽しむこと が出来るでしょうか?

自由に体感していただくのが一番ですが、身体表 現に馴染みのない方にとっては、わかりづらいもの かもしれません。けれど、わかりづらいものと向き 合ってみることで「わからないものに、どうにか寄 り添ってみる」という体験ができるチャンスかもし れないなと思います。日常生活でもなかなかできな いけど、そういった力は大切なものなのではないで しょうか。自分で何らかの身体表現を実際にやって みるのもいいかも。ダンサーがどのような気持ちや 感覚でその場にいて身体を動かしているのかをよく みて、感じて、自分の記憶や現在の状況と自由に重 ねたりしてみると、自分の身体を見つめることにも 繋がり、いつもとは違った新しい感覚の発見になる かもしれません。

ダンスカンパニー ときかたち パブリックプログラム 2018年3月17日(土)、18日(日)

前橋市芸術文化れんが蔵、竪町スタジオ(予定)

*詳細はアーツ前橋公式サイトをご覧ください。

OBANA AIKO 尾花藍子

ていますか?

東京都出身 東京都在住。ダンスカンパニー ときかたち主宰。シェアハウス & スタジオ〈LAB83〉代表。 美大絵画学科卒業後、身体を使った行為表現を路上で始める。美術・プロジェクト作品発表を経て、近年は 主に振付家・演出家として活動。「環境に振り付けられる身体」を軸に、文化的背景を内包した様々な「場」で 作品を創作。各々の表現媒体の特徴を活かしながら、表現や思考の可能性の幅を広げる活動を展開している。 若手演出家コンクール 2014 ノミネート。横浜ダンスコレクション 2016 コンペティション I ファイナリスト。

MAEBASHI LANDMARKS

#3



&Arts ISSUE 13 6 | 7 8



今回アーツ前橋で滞在制作をするダンスカンパニー ときかたちが、2017年10月にパフォーマンスを行っ た「前橋市芸術文化れんが蔵」をはじめ、前橋のま ちを歩いていると、重厚なレンガ造りの蔵を見かけ ます。その光景は私たちに、まるでそこだけ時間が 止まってしまったかのような不思議な感覚を与えま すが、前橋にこのようなレンガ蔵が多く残っている のは一体なぜなのでしょうか? その答えは、前橋が かつて生糸のまちとして栄えた歴史にあるようです。 明治、大正、昭和と、時代に合わせて少しずつ変化し、 今も前橋のまちに寄り添うように存在するレンガ蔵。 その歴史を探ってみました。



前橋市芸術文化れんが蔵 (旧大竹酒造煉瓦倉庫)

1923 (大正 12) 年 煉瓦造 2 階建、瓦葺 所在地:前橋市三河町1丁目16-27



1923年に造り酒屋の曽田軍平が醸造蔵として 建造。その年に起こった関東大震災の揺れにも 耐え、現在もその姿を残している。1932年から 1972年までは大竹酒造の醸造蔵として3代に渡 り使われていた。2013年に前橋市が保存・活用 を目的に購入し、2014年に内部の柱はそのまま 残す形で耐震補強、照明設備などの工事をし、文 化施設としての活用が始まった。同年、国登録有 形文化財に指定されている。

2階の床板は取り外されているが、元は1階に 酒造桶を並べて仕込みを行い、2階で酒母造りの 作業が行われていた。外壁は赤レンガと黒レン ガ (焼過レンガ) の組み合わせによる凝った意匠 がなされている反面、内部空間は丸太の梁や柱 が張り巡らされた和風建築の趣。演劇やライブ、 展示会など、様々な用途に利用されている。



入り口のアーチ中央には要石を摸した黒レンガの意匠が見られる など、凝った外観となっている。内部には建設当時の梁や柱が残る。



旧安田銀行担保倉庫

1913 (大正 2) 年 煉瓦造 2 階建、瓦葺 所在地:前橋市住吉町2丁目10-2



今号の表紙の撮影を行った旧安田銀行担保倉 庫は、1913年に「群馬商業銀行前橋支店細ヶ澤 出張所 | として建設された。銀行の担保物件とし て集められた生糸や繭の保管庫としての役割を 持ち、繭の乾燥場として当時最新式の機能を備 えていた。その後、群馬商業銀行は1916年に同 じ安田系の「明治商業銀行」になり、1923年に 他の10銀行と合併して「安田銀行」に改称。現 在は協同組合前橋商品市場の管理のもと、一般 倉庫として使われている。2004年「近代の地域 経済を物語る巨大な煉瓦蔵倉庫 | として、国登録 有形文化財に指定された。

倉庫内は木造で、柱や梁にはヒノキや杉が使 用され、内壁には漆喰が塗られている。屋根はキ ングポストトラスという構造で支えられ、2階部 分は柱が一本もない空間になっている。



2階には荷揚げに使った床の穴や滑車などが残されている。外壁は 「覆輪目地(ふくりんめじ)」と呼ばれる珍しい仕上げが施されている。



上毛倉庫

1896 (明治 29) 年 煉瓦造 2 階建、瓦葺 所在地:前橋市表町2丁目25-17



上毛倉庫は、前橋が生糸のまちとして栄えた 1895年に創立した。創立者の江原芳平は、製糸 工場 「天原社 | を設立し、前橋の生糸産業の発展 に寄与した人物。当時の前橋は製糸業の降盛を 受け、三十九銀行や横浜銀行(第二銀行)などの 金融機関が進出。担保となる繭や生糸の取扱量 が次第に増えていったため、大規模な倉庫が必 要となり、上毛倉庫も三十九銀行の担保を保管 するための関連会社として創設された。

かつては若宮町にもレンガ倉庫があり(現・ クラシード若宮)、前橋乾繭取引所での繭の取り 引きが終了する1998年頃までは繭を保管してい たという。

現存する表町のレンガ倉庫は2棟。開業当初 からあるレンガ倉庫は、前橋空襲の際にも焼け 残り、床や屋根を修復して再建した。





箸蔵 (旧勝山社煉瓦倉庫)

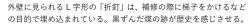
1902 (明治 35) 年 煉瓦造 2 階建、瓦葺 所在地:前橋市本町2丁目3-5





1902年、製糸業・織物業を営んでいた「勝山 社 | の保管倉庫として建造された。 勝山社は生糸 商人の勝山宗三郎が1878年に本町で創設した製 糸工場で、1898年には製糸業から織物業へ事業 を転じている。その後、銀行の担保倉庫や書物庫 として利用され、近年では内部の改装や出入り 口の新設を経て、カフェや居酒屋などの飲食店 として利用されている。2008年、国登録有形文 化財に指定された。もとは敷地内の別の場所に あったものを昭和の頃に基礎ごと持ち上げて移 設したらしい、と教えてくれたのは、現在この場 所で「和食ダイニング箸蔵」を経営する店長の 小室瞬介さん。たまたままちを歩いていて、空き 店舗になっていたこの建物を見つけたという。 国道50号から一歩入った路地にひっそりと立つ、 隠れ家的な人気店。







総黒レンガの外壁は重厚な窓の造りと相まって独特な存在感を 放っている。店内の壁にもレンガが露出している。

9 |

「お気に入りの古道具」菊池敏正

骨董と呼べる程の物ではないが古道具の類を蚤の市で見つけると、衝 動的に買ってしまう事がある。それらは実際に使う為に購入するのでは なく、単純に道具の形状が気に入っているだけであり、鑑賞のためのオ ブジェのような感覚である。外国に出かけた時などはアンティークマー ケットに出向き、用途のわからない古道具を眺めては、気に入ったもの を見つけ出し購入することもある。もちろん私が手に入れることのでき る程のものなので、さほど珍しいものや高価なものではない。特に昨年 は長期間イギリスに滞在していたこともあり、休日になると時間を見つ けては色々なマーケットに出向いた。私はもっぱら銀食器や家具など高 級な品を扱うマーケットではなく、雑多な日用品やガラクタを扱うマー ケットばかり回っていたが、そこで土中から掘り出しただけであろう物 を扱う店を発見した。並べてある品は、割れた陶器やガラス、空き缶等 があり、いささかユニークな品揃えに目を奪われた。近づいてみると、 そこに古い喫煙用パイプ(素焼きの陶器製)の残骸をアイスクリームの 空箱に入れて売っており、値段を聞くと一つ 70 円とのこと。そこで店 主の老婆との価格交渉の末、まとめて購入することで、箱に入っている 物全てを 2000 円程で買うことにした。元々、壊れているので日本に 持ち帰る際も、何も気にせずトランクに詰め込み持ち帰ったが、改めて 眺めてみると残念ながらガラクタの感じは否めない。あの時に何故、箱 ごと欲しくなったのかは思い出せないが、このような用途を持つ形には、 どこか洗練された印象もあり、眺めていて心地の良い時がある。また、 そういった物と近代美術の関係性を自分なりに想像してみることも楽し みの一つである。



菊池敏正 (きくち・としまさ)

1979年 愛媛県生まれ。2008年 東京 芸術大学大学院文化財保存学保存修復彫 刻専攻博士課程修了。主な個展に 2012 年「Neo Authentic」(Showcase MEGUMI OGITA GALLERY、東京)、 2016年「対峙する客体 - 形態の調和 と造形 -」(POLA MUSEUM ANNEX、 東京)など。近年では2017年「Lustrous Surfaces」(ヴィクトリア&アルバート 博物館、ロンドン)。2018年3月から 開催する「Art Meets 05 菊池敏正/ 馬場恵」(アーツ前橋)に出品。



滞在中には実現しなかったけれども、前橋のまちなかに 滞在したからこそ生まれたアイデアを紹介します。

木村崇人 KIMURA Takahito

滞在期間:73日間 2015年8月1日~9月6日 2016年1月10日~2月17日

● 風見鶏の作品を アーツ前橋のファサードに設置

パンチングメタルの一つ一つに小さな風見鶏を設置 して、風が吹くと一斉に同じ方向を向き、全体で一 枚の大きな鳥になる。

● 鹿を使いこなす

鹿一頭をまるごと使って、食べるための環境を作る。 肉は料理に、革はイスに、骨は食器に、など一頭ま るまる使って生命を食べるような試み。

木漏れ陽プロジェクト室内編

室内用の木漏れ陽照明装置を作り、室内で木漏れ陽 プロジェクトをやる。

WORKS

アーツ前橋では、平成28年度に64点の作品を新たに収蔵しました。 前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約710点になります。 これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残 して伝えていく贈り物です。ここでは収蔵作品と作家を紹介します。



前橋の記憶を想起せよ

白川昌生《サチ子の夢》

SHIRAKAWA Yoshio "Sachiko's Dream" 2002 (平成 14) 年/アクリル、キャンバス、 ゼラチンシルバープリント、布、ボディ/平成 26 年度購入

白川昌生は、アーツ前橋で最初に個展を開催した作家です。北九 州出身の白川は1970年に渡欧、13年間の滞欧生活を経て、1983 年に帰国する際に、白根開善学校高等部の美術教員の職を得たこと をきっかけに群馬に住み始めました。現在も、大胡町にアトリエを 構え、精力的に作品を発表しています。また、昨年の群馬県立近代 美術館における「群馬の美術2017 地域社会における現代美術の 居場所」展で、白川の「群馬県朝鮮人強制連行追悼碑」に関する作品 撤去問題が話題となり、名前を知った方も多いのではないでしょう か。「彫刻は忘却の手前に立っている標識」と著書に書いているよう に、白川にとっての作品とは時間の経過と共に歴史の中で忘却され てしまう、さまざまな記憶を想起するための装置として機能します。

本作品も、前橋という街の記憶と強く結びつく作品です。変貌し、 衰退してゆく街の姿を鋭い視線でつぶさに観察し、前橋に実際に住 んでいたファッション・デザイナーの話を再構成しながら、個人の 体験を一つの時代の記憶として提示しています。1950年代から 1960年代の前橋におけるファッションを巡る熱気を当時の記録写 真を使用しながら再現し、1990年代に空洞化した前橋の商店街に 佇む若い女性の肖像を象徴的に配することで、ある個人の夢をフィ クショナルに語ろうとします。個人が歩んだ人生の軌跡を再構成し、 それを生み出した時代の社会や制度を想起させることで、無名の存 在である個人が時代の証人になるのです。

石坂亥士・山賀ざくろ 特別養護老人ホームえいめい

TOPIC

「森」の続きで見つけた「玉手箱



2016年の夏に開催した「表現の森 協働 としてのアート」展の継続事業として、本年 度より「えいめい音の玉手箱」と題し、石坂亥 士(神楽太鼓奏者)と山賀ざくろ(ダンサー) は、特別養護老人ホームえいめいに入居して いるお年寄りの皆さんと1か月半に1回交流 しています。

当日はあいさつや説明は特にせず、おやつ 後の時間に広いホールに座っている70名ほ どのお年寄りたちの間へ、打楽器の音やダン サーが入ってきたら始まりです。一緒に打楽 器を鳴らしたり、手拍子をしたり、体をゆす ったりよじったり、目でダンサーの動きを追 ったり、耳をふさいだりすましたり、はたま た音をものともせずにぐっすりと寝たり-様々なリアクションがお年寄りの皆さんから も生まれています。昔のお祭りやご自身の出 身地の楽器のお話をしてくださる方もいて、 リズムによって過去の記憶も引き出されてい るようです。施設のスタッフさんの中には、 楽器をずっと振ったり、笑っていたりするお 年寄りの様子を見て、普段との様子の違いに 驚いている方も。45分ほどテーブルごとのグ ループや1人ひとりの反応を見つけてはセッ ション。施設のスタッフさんが様子を見なが らトイレなどの介助へ移り、自然とリズムが 終息していきます。施設の日常に寄り添いな がらも、何に出会うかわからない「森」の続き でもあり、開けるとどうなるのか分からない 「玉手箱」でもある本プロジェクトの様子は、 表現の森特設サイトで報告しています。

https://www.artsmaebashi.ip/FoE/



易し名語為暖。

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアート スクール受講生が立ち上げたプロジェクト。 街を歩いて気になるものをアーカイブして いきます。活動はFacebookでチェック!

https://www.facebook.com/ushiromaebashi/

「ようこそ、こけしのまちへ」

群馬総社駅の近くに立っている看板。 絶妙なセンスですね。 前橋はこけしのまちでもあります。



コレクターズ・ファイル

街の人が集めているものを紹介してもらうコーナー。 それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。 集めればそこに新たなる美が宿る?









小さい頃になかなか遊ばせて貰えなかっ た思い出があり、その反動や懐かしさ から集め始めました。家の近くのリサ イクルショップや秋葉原にある専門店 などでよく購入します。お気に入りの ソフトは、リアルタイムでも一番よく 遊んだ『マリオペイント』。スーパー ファミコンに専用マウスを繋いで絵を 描くソフトなのですが、当時パソコン でもあまり普及していなかったマウス を、ゲーム機に挿して遊ぶというのが かなり革新的でしたね。



13 COFFEE ROASTERS 五十嵐達郎さん

情報求む! 前橋で「こんな面白いモノを集めている人がいる!」という情報があればアンドアーツまでお寄せください。

EVENT まちなかイベント情報

「すみれのオープンラウンジ」

2018年3月8日[木] 18:00 - 23:00

創業カフェムーちゃん 前橋市創業センター 1F

お料理を食べながら、ポップス尺八奏者すみれさんの演奏が聴けます。

ムーちゃん特製の一品料理とつまみ類を提供。定員 15 名、会費 3,000 円 (要予約)

「第二十四回弁天通り大七寄席」

2018年3月10日[土] 第一部 開演 13:30 / 第二部 開演 16:30 弁天通り、(有)大七茶舗二階

江戸っ子の乱暴者をたしなめる滑稽噺「天災」と、医者と役者の出会いが生んだ名作 「名医と名優」でお楽しみください。定員 40 名、料金 2,500 円

「第8回うたごえ広場」

2018年3月11日[日] 開場 13:30 開演 14:00

前橋文学館ホール

今回の出演は、ソプラノの朝倉美幸さん、内田もと海さん、吉田早苗さんと ピアノの石渡由恭さんです。全席自由席 1500 円

EXHIBITION アーツ前橋 展覧会情報

今月のおすすめ

アーツ前橋ショップ mina



ハンカチ専門店の H TOKYO と、京都の福祉 施設 NPO 法人スウィングがコラボレーショ ンして生まれた京都ハンカチ(1,944円)。 「京都っぽい」(ピンク/ネイビー)、「モーニン グ」、「英数字」の3種類展開です。

横堀角次郎と仲間たち 草土社の細密画から、 郷里赤城山の風景まで

2018年3月17日[土]-5月29日[火]

開館時間: 11:00 - 19:00 (入場は18:30まで)

場:アーツ前橋 地下ギャラリー

休館 日:水曜日、(3月21日は開館し、翌日休館)

観 覧料:一般500円、学生·65歳以上·団体(10名以上)300円、高校生以下無料



横堀角次郎《赤城山》1960年 個人蔵

群馬県勢多郡大胡町 (現・前橋市) に生まれた画家・横堀角次郎 (1887-1978) は、 17歳で上京し、岸田劉生との出会いによって画家としての人生を歩み始めます。岸 田の薫陶を受け、同時代の画家たちと交わりながら穏健な自然描写に徹した作品を 発表しました。横堀は群馬との結びつきを大切にし、毎年のように郷里に帰っては 幾度となく赤城山の田園風景を描きました。それらの風景画は、対象を前にして描 くひたむきな制作態度から生まれたものです。画家の中川一政は彼を評して「君の 絵は血が通って暖かかった」と述べました。地元では「角さん」と呼ばれて慕われ 続けた横堀角次郎。2017年に生誕 120年を迎え、2018年は没後 40年の節目の 年となります。本展では、100点を超える横堀の作品と、共に歩んだ仲間たち21人 の作品を交え、画業の全貌をご紹介します。

※関連イベントや展覧会詳細は公式サイトをご覧ください。

同時期開催

「Art Meets 05 菊池敏正/馬場恵」

2018年3月17日[土]-5月29日[火]

開館時間: 11:00 - 19:00 (入場は18:30まで)

会 場:アーツ前橋 1Fギャラリー

休館 日:水曜日(3月21日は開館し、翌日休館)

観覧料:無料 主 催:アーツ前橋

&Arts ISSUE 13 アンドアーツ第 13 号

発行: 平成30年2月28日 企画・発行: アーツ前橋 制作コーディネート・編集: 一般社団法人前橋まちなかエージェンシー

ライター:遠藤千尋 アートディレクション・デザイン:殿岡 渉(あしか図案) 写真:上原ミワ

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16 TEL: 027-230-1144 FAX: 027-232-2016 www.artsmaebashi.jp